

一・
一ツ瀬川流域の

姿

1 川の特徴

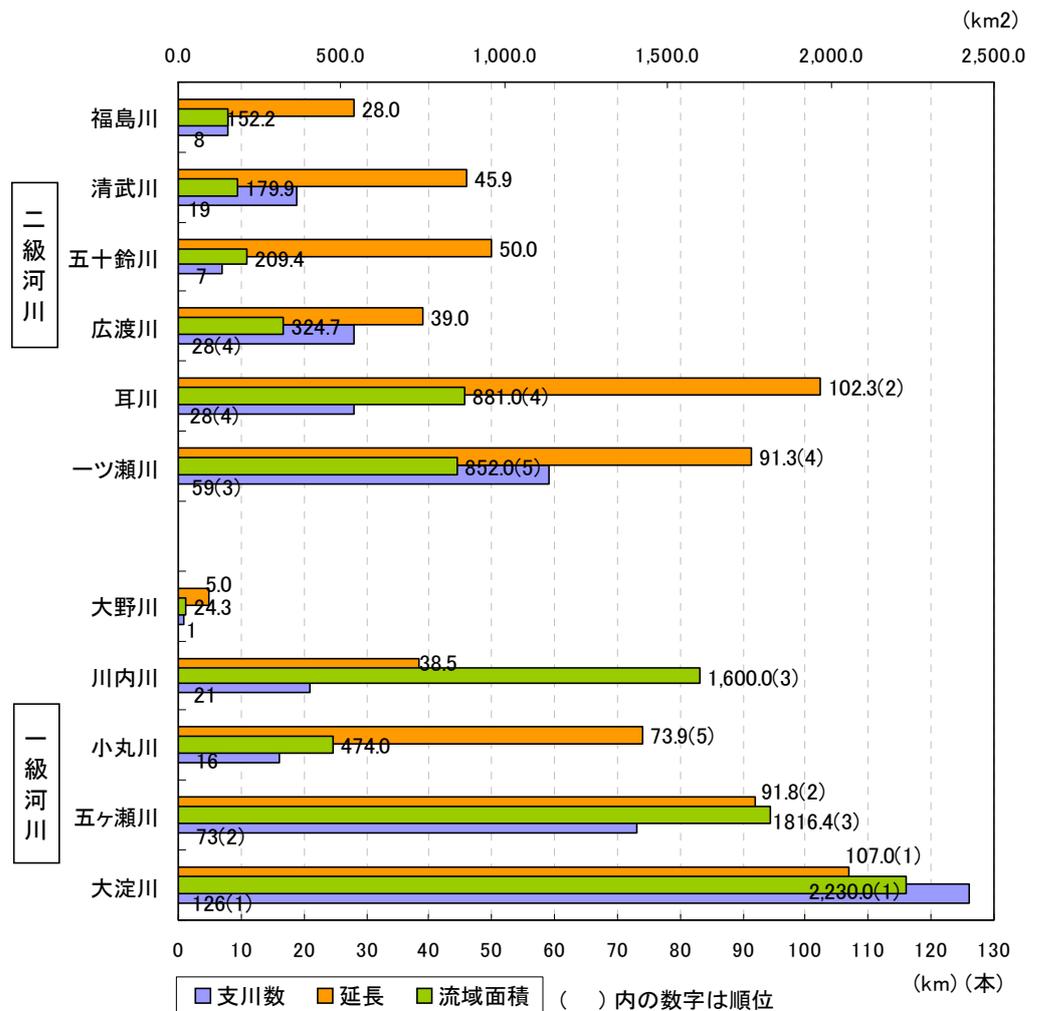
1) 一ツ瀬川流域

一ツ瀬川は、九州の屋根をなす九州山地にその源を発し、板谷川、尾八重川、小川川、銀鏡川などの米良山中の水を集めて東南に流れ、さらに西都市に入って三納川、三財川を合わせて東流し、河口部の入江を経て日向灘に注ぐ、全延長 91.3km（県内第 4 位）、流域面積 852km²（県内第 5 位）の二級河川です。支川は 3 次支川まで含めると 59 本（県内第 3 位）もあり、全延長の約 8 割は九州山地で、河床から山腹にかけては険しいV字谷を形成しています。

上流は県境の市房山(1,722m)をはじめとして石堂山、樋口山、天包山、烏帽子岳、地藏岳、オサレ山、龍房山などの標高千メートルを超える山が林立しています。中流から下流の両岸には洪積台地が迫っており、その間に妻、三納、三財、新田、富田、佐土原などの沖積平野が開けています。



一ツ瀬川の関係市町村は、椎葉村、西米良村、西都市、佐土原町、新富町の 1 市 2 町 2 村です。



宮崎県内の主な河川における比較
 (宮崎県土木河川課・砂防課資料より)

1 川の特徴

2) 約 800 万年前からの変遷 - 下流地域の形成 -

一ツ瀬川の下流に広がる宮崎平野は、別名日向海岸平野ともいい、宮崎層群とその上部を不整合に覆う洪積層、沖積層によって形成されています。

一ツ瀬川の流域である九州山地の東部山麓地帯は、第 3 紀新世後期から同じく鮮新世を経て第 4 紀更新世前期に至る、およそ 800 万～150 万年前の地質時代の間、海岸線に位置し、波を受けていました。その波に削られた砂礫や泥土が、当時海底にあった、現在の宮崎平野の位置に堆積し、新第 3 紀層と呼ばれる宮崎層群を造り出しました。

宮崎層群は、様々な堆積環境から、青島相・宮崎相・妻相の 3 つに区分され、いずれも西に高く、東に向かって緩やかに傾斜しています。

一ツ瀬川の最下流部にある新富町付近の地層の構成を見ると、その成り立ちは、次のようになっています。

- ①現在の一ツ瀬川と小丸川の前身（昔の姿）であった古一ツ瀬川と古小丸川が、九州山地東部と尾鈴山地以南の山麓から海岸に扇状地や三角州を形成し、砂礫や泥土を堆積した。（妻相の内の川原部層の形成）
- ②その後気候の温暖化が進み、内陸部まで海水の進入を受けた。
- ③その結果、穏やかな海の底には砂礫や泥土が沈積した。（妻相の内の妻部層の形成）
- ④次に、古一ツ瀬川と古小丸川の河口部に三角州が進出し、泥岩と砂岩を堆積した。（妻相の内の高鍋部層の形成）
- ⑤その後、約 180 万～1 万年前の第四期更新世に入ると古一ツ瀬川と古小丸川は、地盤運動や気候変化に応じて、氾濫を繰り返し、あるいは谷を刻みながら流れた。
- ⑥20 万年程前から後の更新世後期に堆積した砂礫や泥土層は、現在の台地を構成する洪積層となった。
- ⑦更に、火山活動が活発になると、台地表面に火山灰が積もった。
- ⑧約 3 万～1 万年前に訪れた氷河期により、海面が現在より 100m も低くなった。
- ⑨それまで陸地であった所は、100m 以上の高さになり、古一ツ瀬川と古小丸川によって深い溪谷がえぐられた。
- ⑩やがて最終氷河期も去って暖かさを取り戻した約 1 万年前に始まる完新世に、これらの溪谷は、一ツ瀬川と小丸川の搬入する堆積物に堆積されて、現在の新しい沖積平野に姿を変えた。（現在の宮崎平野の原形）
- ⑪その後も台地や谷底は隆起を繰り返し、海岸段丘や小さな河岸段丘となり、また浅海底の一部が陸化して、新しい海岸平野に生まれ変わり、現在の宮崎平野を造り出している。

3) 西都原一帯の地形の変遷 - 中流地域の形成 -

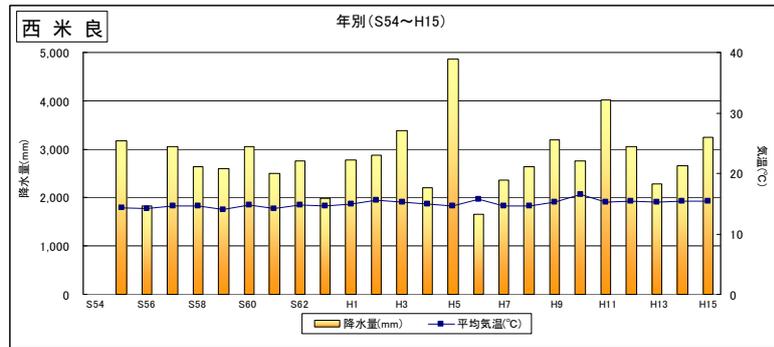
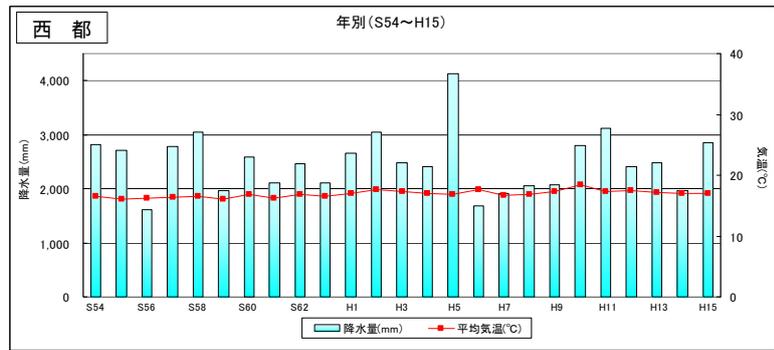
西都原一帯は、宮崎平野の一部で、旧海底の隆起によって形成された洪積台地を、九州山地に源を發し、米良山峡をいっきに流れる一ツ瀬川が浸食し、右岸に西都原、左岸に茶臼原から新田原にいたる台地を残して、さらに穂北から佐土原にいたる肥沃な沖積平野をつくりあげました。西都原一帯は、海拔 20～40m 地点と、海拔 60～70m 地点とに広がる段丘面から、過去に少なくとも数回は隆起したことが分かります。現在の妻の街は、海拔 20m 以下の一ツ瀬川の氾濫原に發達したものです。弥生時代になると、海水の後退と一ツ瀬川による堆積作用がすすみ、平野や低湿地では稲作が始まりました。

1 川の特徴

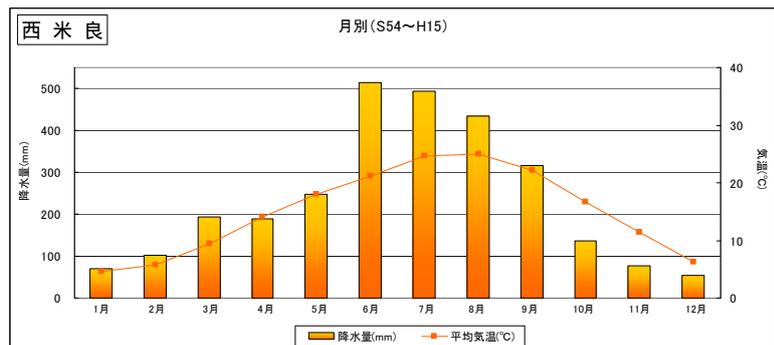
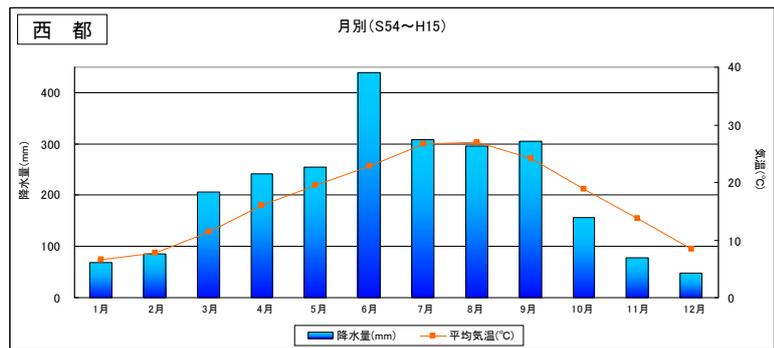
4) 流域の気候

宮崎県は南海型気候区に属しており、地勢が入り組んでいて複雑なため地域差が大きくなっています。

一ツ瀬川流域3地点の降水量・気温を宮崎地方気象台の平均気温【18.0℃】と降水量【2,250mm】（H15.2～H16.1）を比べると、気温は若干下回っており、降水量は全て上回っています。特に一ツ瀬川の最上流域を占め、宮崎中央部最西端にあたる西米良の値は、『冬期の低温と夏の集中豪雨』という特徴をよく表しています。



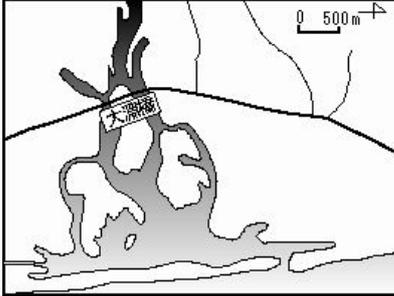
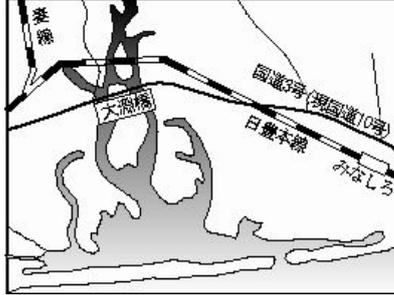
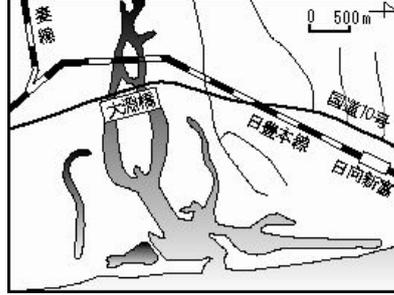
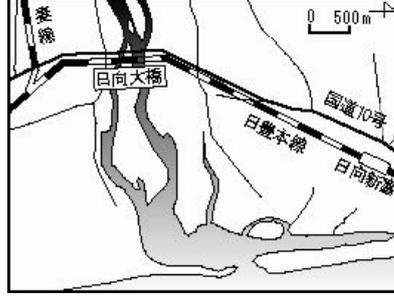
平均降水量及び平均気温【年別】



平均降水量及び平均気温【月別】

2 川の変遷

1) 河口部の変遷

	<p>【明治 35 年（1902）】 現在の王子地区の北部で外海と接していました。河川は蛇行し、中洲があり、河川の区域はまだ固定されていませんでした。大洲橋は当時から架けられていましたが、上流の一ツ瀬橋はまだなく、川を渡るには渡し舟などが活躍していました。</p>
	<p>【昭和 10 年（1935）】 一ツ瀬川の流れは明治 35 年と余り変わっていません。しかし、竹瀨～中須～舟津地区沿いまで堤防が築かれています。また、鉄道（旧国鉄日豊本線）が大洲橋上流を走り、またその上流には一ツ瀬橋が架けられ、中洲は一部陸続きとなっています。</p>
	<p>【昭和 28 年（1953）】 大洲の対岸である福島から二ツ建にかけては、堤防が完成し低湿地の干拓が進んで水田地帯となっています。しかし、左岸側（新田村・富田村）においては、竹瀨から延びた堤防が作りかけでした。また、柳瀨では一ツ瀬川沿いに堤防が一ツ瀬橋付近まで築造されていますが、三財川（通称濁川）沿いはまだ築かれていませんでした。一ツ瀬川河口は、明治 35 年では王子の北側に位置していましたが、ここでは南に移動しています。</p>
	<p>【昭和 43 年（1968）】 一ツ瀬川沿岸の堤防が完成し、河川幅が固定されました。昭和 29 年（1954）に日向大橋が完成し、国道 10 号も鉄道と平行して新設され、交通網が整備されました。また富田干拓地は水田地帯となりました。</p>

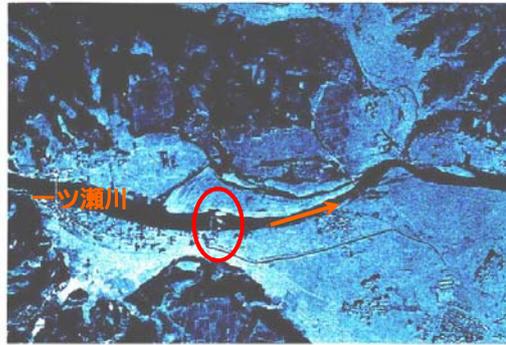
出典：佐土原町史

2 川の変遷 2) 河道の変遷
三財川合流点

	<p>【昭和 22 年】 一ツ瀬川の堤防は整備されており、その堤外地内を蛇行しながら流下しています。特に、柳瀬付近の三財川蛇行は顕著で、自然河道の形態を呈しています。</p>
	<p>【昭和 50 年】 三財川の柳瀬地区と現王島地区の蛇行部をショートカット（捷水路）し、治水安全度の向上に努めました。 旧河道は、月の輪として残っています。</p>
	<p>【昭和 61 年】 河道形態は昭和 50 年と大きく変わりませんが、周辺道路が整備されています。</p> <p style="text-align: right;">資料：県資料による</p>

2 川の変遷

杉安橋下流付近



【昭和 22 年】

川仲島に杉安堰が建設されており、川仲島の中洲は農地として利用されています。杉安堰より右岸側に農業用水路が整備され、農地が広がっています。宅地はまばらに点在しています。



【昭和 61 年】

川仲島の中洲は公園として整備されています。平地部は圃場整備が進み農地が広がっています。宅地も、一ツ瀬川沿いと左岸山際に広がってきています。



【平成 7 年】

川仲島公園下流は砂州が広く形成され、水量も以前に比べ少なくなってきました。農地面積が次第に少なくなり、宅地化が一段と進み、一ツ瀬川沿い、左岸山際と道路沿川沿いに広がってきています。

2 川の変遷

3) 富田入江とニッ建入江

一ツ瀬川河口域には、宮崎県内の河川では数少ない入江が存在します。現在は富田入江ですが、河川改修による築堤が行われた昭和20年代までは、左岸に富田入江、右岸にニッ建入江が深く入り込んでいました。

富田入江には、白砂青松の素晴らしい景観が広がっていました。松林にはクロマツの大木が多数生育していたため、人々は年に数回の落ち葉かきを行い、落ち葉を炊事、風呂の燃料として利用していました。落ち葉かきにより、松林の林床が清潔で良好な状態を保たれていたため、松露と呼ばれるキノコが生えるなど、大変良好な松林を形成していました。

また、一ツ瀬川の河口が富田入江の奥部にあったため、入江内の流れは速く、水深は現在とは比較にならないほど深くなっていました。陸域に近い浅瀬付近ではたくさんの藻場が存在し、魚介類にとって格好の隠れ場、産卵場などになっていたため、海、川の魚が多種多様に生息していました。これらの魚を求めて、人々は工夫を凝らした様々な漁法を用いて、たくさんの魚介類をとっていました。

その後、松林は落ち葉かきなどの人間の管理が無くなったため、マツクイムシなどの害虫による枯損が相次ぎ、縮小していましたが、植林などにより徐々に回復し、動植物の生息・生育の場となっています。河口は、昭和27～28年頃に消波ブロック等で固定しました。河口の固定化により、富田入江内に一ツ瀬川の流れが無くなり、流れが緩やかになったため、堆砂が進んで水深が浅くなりました。昭和54年に宮崎県で開催された第34回国民体育大会において漕艇競技が富田入江で行われるようになったため、入江の浚渫を行って漕艇競技コースを整備し、浚渫した土砂は入江の最奥部に埋め立て、富田浜公園を整備しました。

富田入江は昔とは状況は異なりますが、現在でも浅瀬の藻場ではたくさんの魚介類が利用し、入江付近の干潟では多種の渡り鳥が冬の渡りの中継地に利用するなど、動植物にとって生息・生育場として利用される、大変重要な区域です。

ニッ建入江は、干潮時には広大な干潟になり、戸板引き、建て網などの漁法によりボラなど、干潟の水路ではクルマエビ、モズクなど豊富な魚介類がとれました。その後、昭和25年の堤防完成によりニッ建入江の入口は締め切れ、徐々にその水域は縮小されて、開田（塩田、農耕地）、養鰻場に代わっていきました。そして戸板引き、建て網などのボラ漁法とともに完全にその姿を消しました。

現在、国道10号が西に移り、中洲に掛かっていた大洲橋と福島橋の橋脚と金比羅宮がニッ建入江の名残を留めています。



富田入江の最奥部

3 流域の自然

魚類（主に見られる種）

【上流（源流）域（椎葉村）】

ヤマメ（マダラ）、アブラメ（タカハヤ）、ウナギ

MEMO

源流部に位置する九大演習林の中には近年では珍しくなった天然ヤマメが生息しています。天然ヤマメは、放流したヤマメよりも赤味が強く、大きいのが特徴です。

漁協がヤマメ、ウナギ、オイカワの3種を放流しています。ヤマメは25,000匹を放流しますが、九大演習林内に生息する天然ヤマメと養殖ヤマメを交配し、できるだけ天然ものに近い個体を残す努力をしています。

なお、アユは川の水温が低いため、定着しないので放流していません。



天然ヤマメ
写真：九大演習林

【中流域（西米良村～杉安）】

一ツ瀬ダム建設前、主に見られた種

アユ、ウナギ、ウグイ（イダ）、ヤマメ（マダラ）、タカハヤ（アブラメ）、カマツカ（カマスカ）、ヨシノボリ類（ゴロメ）、ボウズハゼ（フシノメもしくはタカノクチ）、オイカワ（ハエもしくは赤ベエ）、コイ、モクスガニ（ツガニ）、サワガニ

一ツ瀬ダム建設後、主に見られる種

フナ、オイカワ（白ハエ）、ニジマス、ブルーギル、ナマス、ヨシノボリ類、ハス、ソウギョ、テナガエビ（ダクマエビ）

MEMO

ダム建設前は天然アユ、ボウズハゼ、モクスガニなどが遡上していましたが、ダム建設後は遡上できないため姿消しました。現在、アユは放流個体が生息し、ダム湛水域直上の流込みの瀬において産卵を行っています。

また、ダム建設前には腹回りに薄い黒色の斑点があるオオウナギ（ゴマウナギ）が生息していましたが、現在ではほとんど捕れません。現在の放流ウナギより太くて美味だったと言われています。

【下流域（杉安～河口付近）】

アユ、オイカワ、コイ、カワムツ、カマツカ、ヨシノボリ類、ボウズハゼ、ゴクラクハゼ、ウグイ、フナ、ナマス、ウナギ、ハス、スッポン、モクスガニ、テナガエビ

MEMO

ダム建設前には放流はしていませんでしたが、ダム建設後には魚介類の自然遡上が少なくなったため、漁協が、アユ、ウナギ、ヤマメ、コイ、オイカワ、ニジマス、フナ、モクスガニの8種を放流しています。放流したアユ、ヤマメなどは集団で飼育されているため、天然と習性が異なり、従来の漁法（友釣り、毛針釣りなど）ではなかなか釣れないと言われています。



モクスガニ（ツガニ）

一ツ瀬川は、宮崎県内でモクスガニが多い河川にあげられます。その他には、北川、酒谷川、広渡川、耳川があげられます。

一ツ瀬川は、スッポンの確認例が少ない河川でしたが、昭和57年の台風によって養殖場から約3,000匹逃げ出したため、現在では確認例が増加しました。

3 流域の自然

【河口部（汽水域）】

クロダイ（チヌ）、ボラ、スズキ、サヨリ、コノシロ、マハゼ、シマイサキもしくはコトヒキ（スミヤキ）、サッパ（ママカリ）、ヒラメ、カイワリ、エイ、ギンガメアジ（エバ）、キス、コチ、トビハゼ、シマハゼ、アカメ（マルカ）、チチブ、ウナギ、シラスウナギ（ウナギの稚魚）、シロウオ、シラウオ、エビ、ワタリガニ（ガザミ）、モクスガニ、シジミ、ハマグリ、チョウセンハマグリ（スワプト）、アカガイ（シシガイ）

MEMO

現在、アカガイ（シシガイ）はほとんど捕れませんが、昔は数多く捕れ、身は食し、貝殻は浅瀬の漁法の一つであった貝殻引きに使用していました。ハマグリは河口の川側、チョウセンハマグリ（スワプト）は河口の海側に生息しており棲み分けています。シジミは JR 架線橋付近から一ツ瀬橋までに少数ながら生息しています。河口から日向大橋までの区間では、アオノリもとっていました。

上流域に生息する主な陸上動物

- （哺乳類）シカ、イノシシ
- （鳥類）クマタカ、ヤイロチョウ
- （両生類）ブチサンショウウオ

一ツ瀬ダム周辺に生息する主な陸上動物

- （哺乳類）イタチ、タヌキ、テン、アナグマ（ムジナ）、カモシカ（ニク）、ムササビ（モマ）、ヤマネ、ウサギ、カワネズミ
- （鳥類）ゴイサギ、カワセミ、ヤマセミ、カワガラス
- （両生類）カジカガエル、ベッコウサンショウウオ
- （爬虫類）アオダイショウ、ヤマカガシ、シマヘビ（カラスヘビ）

MEMO

40～50 年前にはカワウソが生息していましたが、ダム建設により姿を消しました。近年ではサギ類、カワウの数が増加傾向にあります。

下流域に生息する主な陸上動物

- （哺乳類）イタチ、タヌキ、ウサギ、コウモリ類
- （鳥類）マガモ、コガモ、カルガモ、チュウサギ、アマサギ、クロツラヘラサギ、ウミウ、コアジサシ、コチドリ、ハマシギ、クサシギ、ミサゴ、カイツブリ、セグロカモメ、カワセミ、ヤマセミ、カワガラス
- （両生類）トノサマガエル、ツチガエル、ウシガエル、アマガエル、イモリ
- （爬虫類）アオダイショウ、ヤマカガシ、シマヘビ（カラスヘビ）

MEMO

河口干潟は、宮崎県で渡り鳥の渡来数が最も多い中継地であり、ガン・カモ類を中心とした冬の渡り鳥を確認することができます。

富田浜入江、旧二ツ建入江、福島中州、及び潮害防止保安林の松林は、シギ・チドリ類、サギ類、カモ類の採餌場・休息地、コアジサシの集団繁殖地として利用されています。

3 流域の自然

植物

一ツ瀬川流域における植物の特徴として、まず最初にあげられるのは、大河内、銀鏡、小川、村所、兒原、都萬などの神社にある鎮守の森があげられます。鎮守の森には、常緑・高木・巨木である御神木が存在し、古くから地域を見守ってきました。これらの神社では、神楽などにより奉納行事を行うなど、地元住民の生活と強く結びついています。

上流から下流にかけて植生の分布を見ていくと、源流域の九大演習林にはブナ、レンゲツツジ（須木が南限）、コウヤマキ（西都市寒川が南限）などが分布し、上流域の石堂山、市房山付近のブナ林にはツクシドウダンやツクシシクナゲ、アケボノツツジなどツツジ科の仲間が多種生育しています。中流域ではヤマツツジ、ツクシゼリなどの河岸植生、杉安県立自然公園付近の右岸側は照葉樹林が分布していますが、山間部の植生は杉安付近で終わります。下流域の平野部では樹林地は少なくなりますが、県内随一の規模を持つ川辺低木ヤナギ林、河口部の干潟ではイセウキヤガラ、ナガミノオニシバ、チャボイなどの塩生植物、入江ではアカメなど魚介類の生息場となるコアマモ、砂丘ではオニシバ、コウボウシバ、コウボウムギ、ハマゴウなどの砂丘植生が分布しています。

また、局所的な植物の分布を見ると、一ツ瀬川下流部右岸・左岸一帯に分布する氷河時代から残る湧水湿地には、サクラハハノキ、ホシクサ、クロホシクサ、シロホシクサが、湿田にはアブノメ、ミズネコノオ、ミズワラビなどの貴重な植物が生き残っています。湿性林を見ると、山地から河口部にかけてサワグルミ林、ケヤキ林、ハルニシ林、ヤナギ林、ハマボウ低木林と変化しています。

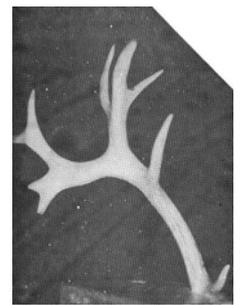
参考資料 メラシカ、コウヤマキ

幻のメラシカ

明治8年頃、西米良村深瀬の中武利三郎は尾股の山中で牛のように大きな鹿を捕獲しました。角は大きく七又の扁平で、普通の鹿の角ではありませんでした。利三郎は片角を切り落として持ち帰りました。

昭和23年、西米良村を訪れた宮崎大学農学部教授中島茂博士と、宮崎大学学芸学部助教授松沢寛氏（後香川大学教授、農学博士）がこの角に興味を示し、農林水産省技官岩田久吉氏の研究室に運び込み、約1年間にわたり研究が続けました。その結果、この種の角を持った鹿が日本に生息していた記録は全く無かったため、その当時に新種と認定されました。しかし、その後は同様の角を持つ鹿を確認できなかったため、現在では種としてはみなされていない、幻の鹿となりました。

出典：米良の自然



メラシカの角

コウヤマキ

コウヤマキは、世界中で日本だけにしかない珍しい植物です。北は福島県から宮崎県まで、日本列島の中部から南部にかけて点々と自生しています。中でも和歌山県の高野山に多いので「高野槇」という和名がつけました。宮崎県では尾鈴山・市房山・掃部岳で囲んだ地域に限って生育しており、三財の寒川付近が南限地となっています。

「森の巨人たち100選（国有林）」に推された吹山のコウヤマキ、上揚地区横平のコウヤマキ樹林が有名です。この三角形の美しい樹形は、南洋のアラウカリア及びヒマラヤスギとともに世界の三大造園木の1つに数えられています。

出典：西都市報「一ツ瀬植物夜話」



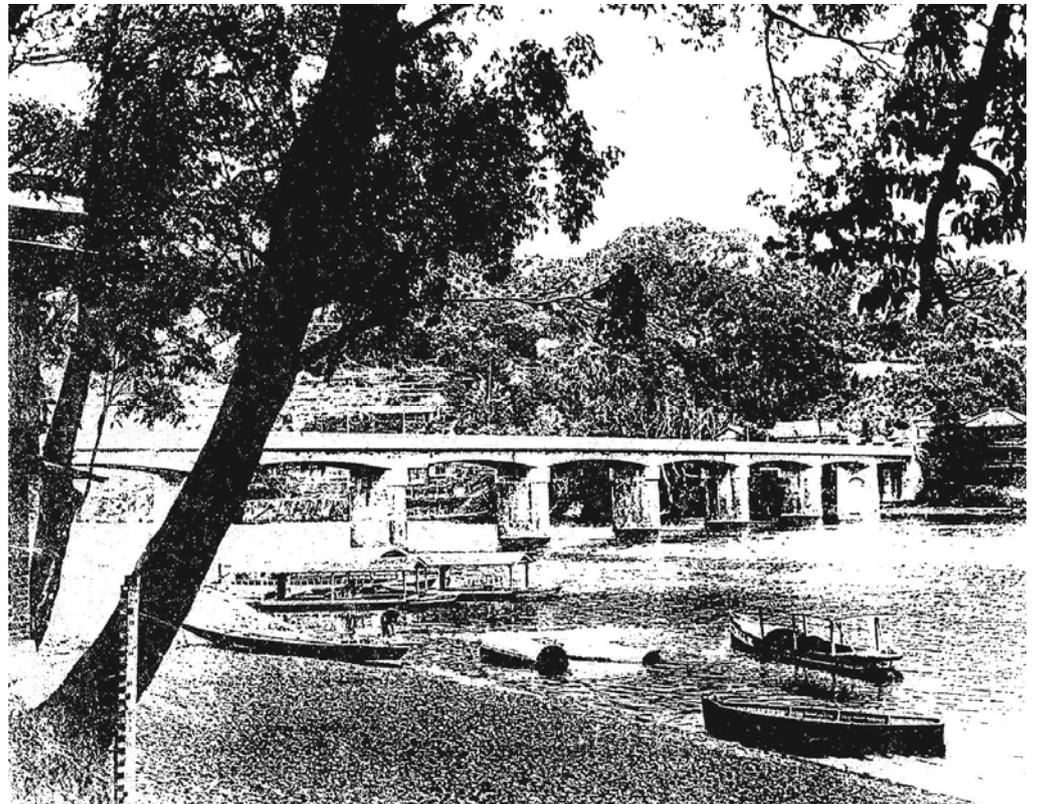
吹山のコウヤマキ

4 流域の景観

1) 杉安 - 日向の嵐山 -

杉安には一ツ瀬川の兩岸に山が迫って出来た杉安峡があります。かつてここは山紫水明の地として名高い場所でした。川魚料理を出し、食事処としても利用されていた旅館が川辺にあり、その旅館から芸者を乗せた屋形船を出して上流の夫婦岩付近まで昇り、自然流下で杉安峡の素晴らしい景色を楽しむなど、常に賑やかで優雅な雰囲気をもっていたことから、「日向の嵐山」と呼ばれ、多くの観光客が集まっていました。また、米良方面から運搬される木炭、一ツ瀬川を流れてくる木材を荷揚げし、4箇所ある製材所で加工した後、大正期に開通した妻線から出荷を行う内陸部のターミナル的な役割も持っていました。そのため、木炭及び木材関係の業務に携わる人々も多数移住しており、大変活気に満ちていました。

しかし、現在はダムによる水量の減少、水の濁り、人々の生活スタイルの変化等により観光客が訪れることは少なくなりました。地元では代わりに遊泳場を造るなど新しい動きはありますが、杉安峡に昔の面影がないのは寂しく感じられます。



杉安橋と屋形船
写真：杉安橋架替工事竣工記念写真帳

2) 藁葺き屋根の地区（西米良村）

西米良村小川・罫の地区。明治末期の風景で藁葺き屋根が続いており、のどかな山村の風景が形成されていました。この当時は、川で魚を取り、焼畑を行って雑穀を収穫し、山に入って山菜、キノコを採り、狩猟によってイノシシなどの獣を狩るなど、昔ながらの自給自足の生活を行っており、質素な生活振りがうかがえます。

4 流域の景観

3) ダム湖に沈んだ村々

西米良村の4地区(越野尾、横野、小川、村所)の一部、旧東米良村の3地区(中尾、八重、銀鏡)の一部は、一ツ瀬ダム建設に伴い水没することが決定しました。上記7地区での水没戸数は361戸、坪数は5,675坪(約19,000m²)にのぼり、西米良中学校越野尾分校(学童数15名)、越野尾小学校(同71名)、横野小学校(同65名)、銀鏡中学校中尾分校(同27名)、中尾小学校(同48名)の5小中学校、及び郵便局、法務局、病院、旅館等を含め大規模な移転が行われました。

ダム工事着手直前の昭和33年頃の越野尾地区は、藁葺き屋根の住居は見当たらず、瓦葺の家が多くなっています。これらの住居は、谷地形の一番低い川沿いもしくは県道沿いに張り付くように密集して建っています。地区から少し高台には、西米良中学校越野尾分校(奥の建物)、越野尾小学校(手前の建物)が建っています。一ツ瀬ダムの水位が下がった時には、校舎は取り壊されているため見ることはできませんが、学校の敷地は確認することができます。

写真：中武雅周氏より提供



ダム湖に沈んだ越野尾地区



県道及び川沿いに張り付く住居

4) 穂北

西都原台地の国道219号線を東に進むと、肥沃な水田地帯が広がります。江戸時代に天領だった穂北は、杉安堰の完成により一ツ瀬川から水を引いて灌漑を行い、穂北平倉地帯を作り上げました。一区画が大きく見える水田は、たっぷり水を含み、収穫期となると黄金の“じゅうたん”のように美しい風景となります。

また、その穂北平倉地帯の後背地には、西都原古墳群がある洪積層台地が位置し、緑豊かな風景となっています。

川田順 歌集「鷺」(昭和15年)より

日向なる
都方の古町はいつまでも
想ひ出づくし埴輪を買いぬ

この山より
船の埴輪が掘り出され
神の渡りし海想はしむ